



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

N o . 4

1996.12.

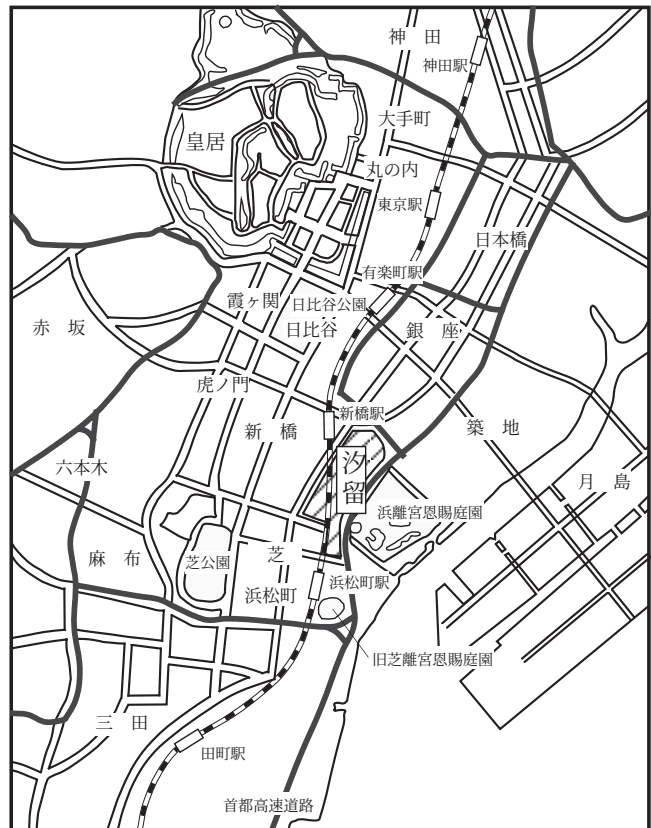
目次	見出し / 執筆者	掲載頁
土木史ニュース	東京「汐留」遺跡発掘調査進む	1, 5
フォーラム	「土木史を考える小委員会」とは？ 馬場 俊介	2
地域のニュース	国指定史跡「志波城跡」の保存整備事業 宮本 裕	3
	長崎県の「近代を創った歴史的遺産調査」について 岡林 隆敏	3
海外土木史	エンジニアリング・ヘリテッジ国際会議、オーストラリアで開催	4
関連学会ニュース	第7回 国際都市計画史学会国際大会、ギリシャで開かれる。	6
学会の動き	第17回土木史研究発表会の開催と論文募集	6
	神奈川台場土木遺構調査報告書の概要	7
	『歴史的鋼橋集覧（第一集）』の供覧開始	
土木史関係図書	土木史関係図書（地域土木史）	8

土木史ニュース

東京「汐留」遺跡発掘調査進む

日本の江戸屋敷跡や鉄道建設の原点である「汐留」の遺跡発掘調査が進み、当時の状況が次第に明らかとなってきている。「汐留」は（図－1）に示すとおり、現JR新橋駅と浜離宮庭園に近接した場所に挟まれるように位置している。ここは徳川時代に龍野藩脇坂家、仙台藩伊達家、会津藩松平家の各上屋敷等が合計7万坪以上にわたって存在していた。時代が明治に変わると、日本は大きな西洋文明の影響を受け「汐留」は明治3年3月から東京・横浜間の鉄道敷設のための起点として、測量・工事が開始された。当初、鉄道頭井上勝や、お雇外国人エドモンド・モレル等の指導の下に工事が進められ、明治5年7月完成、9月から「新橋ステーション」とし本格営業が開始された。大正3年東京駅の開業にともない、この新橋駅は貨物専用の「汐留駅」に変わった。

昭和61年国鉄の分割・民営化に伴ない、「汐留駅」の業務はすべて廃止され、本地区は、日本国有鉄道清算事業団所管用地に変わって今日に至っている。本地区は、近い将来土地処分が行なわれ大きな再開発事業が予定されている。このため平成3年6月から「汐留地区遺跡調査会」が調査を開始したが、現在は「東京都埋蔵文化財センター」が中心となって、発掘調査を進めている。発掘された遺構や遺品はぼう大である。よって本稿では、土木史的に重要なものを抽出し、概略列記する。（以下5頁につづく）



図－1 汐留位置図

「土木史を考える 小委員会」とは？

土木史研究委員会 土木史を考える小委員会 委員長

馬場 俊介（岡山大学 教授）



「フォーラムのページは、本来、土木史への個人の思いを書き綴る場所」なのだそうだが、今回は「土木史を考える小委員会」の活動報告を書いて欲しいと依頼された。両方同時に満足した方がベターなのではと勝手に思い込んだ結果、まず、小委員会の設立の経緯を土木史への思いに触れつつ紹介し、次いで、小委員会の活動状況を報告することにした。

「土木史を考える小委員会」は、土木史フォーラム小委員会と同じ平成7年度に発足した出来立ての委員会である。委員会の発足にあたり、筆者の現状認識はつぎのようなものであった。すなわち、教育対象としても研究対象としても、土木史への期待感と事前評価は高い（無視しようとする声も無論大きい）。しかし、「工学の範疇での史学」としての枠組みを今後どう構築していったらよいのか、きちんと整理されているとは言い難い。平成8年度で16回を数える研究発表会には70編近くもの論文が出されているにもかかわらず、他分野からの「お試し参加」や、地方土木行政からの参入は目立っても、真の意味での後継者（本腰を挙げて土木史を研究しようとする若手）が増えてこない。さらに、土木史への実学的なアプローチである土木遺産の保存活用に関していえば、調査こそ軌道に乗っているものの、保存活用が社会的に認知されて行くのかどうか不透明で、今後乗り越えなくてはならない山があまりにも多い。こうした不安や危機感を論じようにも、幹事会はルーチンワークで忙しくなり過ぎ、かつ、若返し過ぎでしまい、「委員会には若過ぎ、幹事会には年取り過ぎた熟練研究者」が討議に参加できる場がなくなってしまった。

そこで、土木史で今後何をすべきかだけを考える戦略的な小委員会を作り、その時々懸案となった課題について知恵を出し合う場を提供していただけないかと、大熊幹事長（当時）経由で主委員会に懇請したのである。土木史学の振興こそが、21世紀の土木工学を精神的に救う道だと信ずる筆者にとって、個人の非力を乗り越え英知を結集するには、土木史に一家言ある個性ある研究者の糾合こそが最良の策だと思われた。

かくして誕生した小委員会だが、初年度では3

つの目標を掲げた。①若手研究者の養成（ポストをどう用意するか）、②阪神大地震を踏まえた道路橋の2G対応の補強問題、③近代土木遺産の保存活用マニュアルの作成、である。小委員会のメンバーは、この3点に対応するように選定された（①篠原修、清水慶一、為国孝敏、②小林一郎、島谷幸宏、③伊東孝、後藤治、知野泰明の各氏）。

最も大切な議題であったはずの①には、最も短い時間しか当てることができなかった。その結論も、土木史研究の若手といっても数が限られているので、動静を随時把握しておこうという程度のものであった。②の問題は、某コンサルタントから打診があって初めて、その存在が明らかになった。震災後に急きょ作られた新耐震基準によれば、戦前の道路橋のほとんどが「補強不能」となり、結果として取壊しが加速されるのでは、という危惧の念であった。「新しい耐震設計の考え方と文化遺産、景観」という題目で企画されたシンポジウムは、土木史研究委員会の主催で実施に移され（平成7年12月19日）、かなりの手応えも得られた。詳しい内容は、土木学会誌11月号の委員会報告をご覧いただければと思う。③の出版事業は、文化庁の建造物課から打診のあったもので、出版社「ぎょうせい」による刊行を前提に編集が進められた。強力な執筆陣を用意しただけのことはあって、項目立てまでは順調に進んだが、いざ執筆となると予定は未定で作業はとめどもなく遅れてしまい、出版担当者を呆れさせる事態となった。これ全て筆者の腑甲斐なさの所以であるが、平成8年度中には何とか刊行に漕ぎ着けたらと願っている。

本小委員会の報告は、今後も定期的に『土木史フォーラム』上で紹介していく積りである。平成8年度には、①「文化財の登録制度と近代土木遺産の保存・活用」シンポジウムの開催、②八十島義之助先生の聞き取り調査、③国際会議の1999年日本開催の可能性の検討、④土木史の教育と研究の方法論についてのフリー・ディスカッション、の4点を目指している。ご意見を頂戴できれば反映させていきたいと思っています。

国指定史跡「志波城跡」の保存整備事業

岩手大学 宮本 裕

東北自動車道の建設にあたり、盛岡市郊外で太田の方八丁といわれてきた志波城跡が発掘調査された。志波城の竣功は「日本紀略」によれば、胆沢城（水沢市）より1年後の803（延暦22）年で、造城使は坂上田村麻呂である。当時の蝦夷征討・開拓の前線基地として建設され、胆沢城におかれた鎮守府の機能を北辺において代行した所と推定される。およそ10年ほどで水害を理由にその機能は徳丹城（矢巾町）に移されたと思われる。志波城の規模は方八丁の地名が示すとおり約900m四方であった。1976（昭和51）年以来、文化庁や盛岡市教育委員会などの調査および保存整備事業がすすめられている。志波城の築地塀（版築）は本体に柱がない。この塀の外側に溝がめぐらされている。南辺中央の外溝には木橋がある。これを渡ると幅18mの大路とよばれる道路があり政庁まで続いている。南辺築地の中央には五間の門がある。築

地の上には櫓が見つっている。櫓は一辺に14棟あった。保存の全体整備計画の中、第1期（外郭南辺と大路）が工事中で、将来は第2期（政庁）が行われる予定である。工事見学をさせていただいた鴻池組東北支店に感謝する。



大和朝廷最北の基地志波城の保存整備工事

長崎県の「近代を創った歴史的遺産調査」について

長崎大学工学部 岡林隆敏

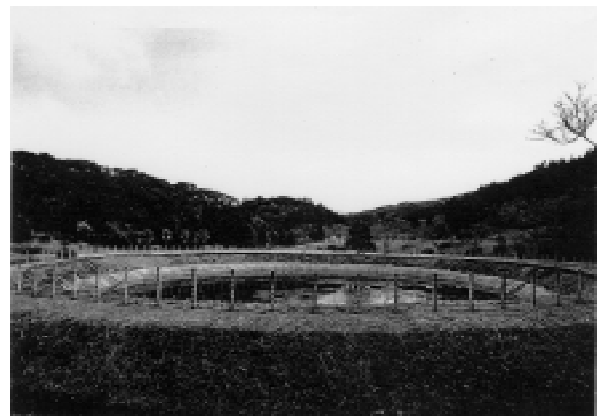
長崎県では、昨年平成7年度から3年間かけて、平成9年度まで長崎県内の近代化遺産の調査を実施しています。これは、文化庁の「近代化遺産（建造物等）総合調査」の補助事業です。ニュースでは、この概要と特徴を報告します。

長崎県では、幕末に長崎市に外国人居留地が建設され、早くから近代の土木技術や建築技術が導入されてきたことが知られています。佐世保市も、1885（明治18）年海軍の鎮守府が創設され、大規模な軍事土木技術が海軍基地建設のために投入されました。しかし、これらの構造物や建設事業について、ほとんど報告されておられません。それは、佐世保市のこれらの構造物が、戦前には軍事機密であったことと、戦後には、米軍基地や自衛隊の基地のために、調査ができなかったことによります。

今回の、長崎県の調査では、佐世保市の基地内に初めて入って調査が行われています。港湾施設、ドック等の土木構造物だけでなく、当時の海軍工廠（現佐世保重工）内に残されている、大規模な明治中・後期の煉瓦造の工場建築等です。また、岡本貯水池や山の田貯水池等、明治中期から

後期の海軍の水道施設等の調査が進んでいます。その他、漁港施設、炭坑施設、鉄道施設等、土木史に関連した施設があります。平成9年度中に調査報告がまとまる予定です。土木史研究発表会で、報告できるものと思います。

また、最近の地域の話では、長崎県でも、古代の集落の発掘が行われ、古代史を書き換える画期的な発見が続いています。



佐世保市岡本貯水池明治33年竣工
（原賀欽一郎氏撮影）

エンジニアリング・ヘリテッジ国際会議、オーストラリアで開催

去る、9月29日から10月2日までの4日間にわたって、オーストラリアのニューカッスルで、第1回エンジニアリング・ヘリテッジ国際会議が開催された。論文の発表は、30日から行われたが、前日29日の夜には、社交クラブである重厚な雰囲気建物のニューカッスルクラブで、会議参加者および、同伴者、オーストラリア工学会関係者が参加して盛大にレセプションが行われた。

会議第1日目の冒頭には、オーストラリアの産業遺産委員会を代表した開催の挨拶に引き続き、アメリカ、ウェストバージニア大学のケンブ教授により基調講演が行われた。この後、ペーパーセッションに入り、3日目まで合計27編の発表が行われた。

論文発表以外の催し物もいくつか行われ、レセプションの他、第1日目の夕刻には、夕食会が開催され会議参加者の友好が深められた。また、第2日目の午後には、郊外の旧リッチモンド炭鉱へのツアーがあり、夕方からは、保存工事が完了したニューカッスル市内の19世紀後半の蒸気機関を動力とした鉄工場で記念碑の除幕式が開催された。

会議の参加者は、合計100名程度で、海外からの参加者は、ニュージーランドから6名、アメリカ、イギリス、日本、アイルランドから各1名ずつであった。

論文の発表は、1セッション約2時間で、4名、各30分ずつの持ち時間で行われた。発表はおよそ20分から25分で、これに質疑が5～10分程度の構成であった。日本からは、NKKの五十畑氏が、日本の橋梁技術の近代化に関する論文の発表を行った。

最終日には、論文発表の終了後に、海外からの参加者をパネラーとして、国際会議の総括が行われて会議の幕が閉じられた。

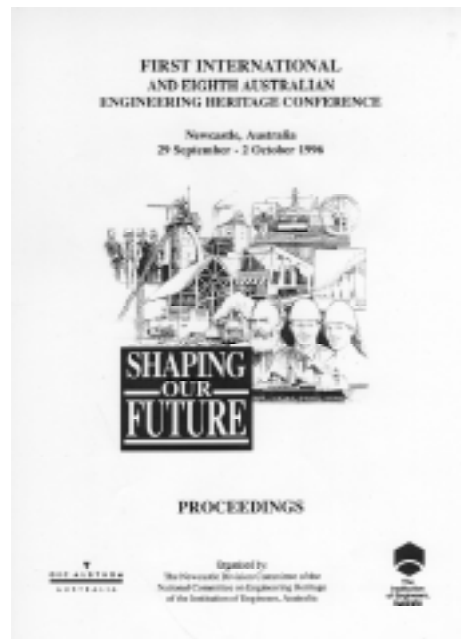
工学全般のコンファレンスであることから、発表内容は多岐にわたり、主なものとしては、アーチダム、橋などの土木構造物、鉄道駅舎の保存再生、街路灯の変遷、風車、水車の発展、都市の植栽計画、炭鉱の遺跡としての再生、鉄道オープンエア博物館構想、航空機の変遷、土木遺跡の評価方法などであった。

発表論文の数は多くはないことから、会議全体は、ゆったりとした時間が取られており、頻繁にコーヒブレーク、会食などの会議参加者が交流を深める機会も盛り込まれていた。会議場には、地元、ニューカッスルの企業にブースを設けてPRの機会を与え、これと引換えに、休憩時の茶菓や昼食の提供を受けることで会議への協賛を得ていた。

この会議に先立ってプレコンファレンスツアー

も開催されており、同伴者を含めた24名が参加した。シドニーの産業史博物館、海事博物館などをはじめ、19世紀の道路、鉄道、炭鉱などシドニー郊外からニューカッスル周辺までの産業遺跡の視察を行った。

ニューカッスルは、港湾、炭鉱、製鉄などのオーストラリアを代表する産業都市であり、この地で技術、産業を対象とした歴史をあつかう国際会議を開催したことについて、地元の新聞は、風刺的な漫画を掲載して会議参加者に話題を提供していた。



発表論文集の表紙



『聞いたかい？俺たちは歴史だってさ。』

(注：BHPはオーストラリアを代表する製鉄会社)

(1996.10.1 ニューカッスルヘラルドより。)

——— 東京「汐留」遺跡発掘調査進む (1 頁よりつづき) ———

(1) 江戸時代

1) 屋敷境の堀 (全長290m上幅3.8m下幅3.6m)

龍野藩と仙台藩とでは大きな相違がある。前者は大きな石を使って粗雑に積み上げているのに対し、仙台藩は四角や五角に面取りした間知石を



写真1 屋敷境石積み (龍野藩)

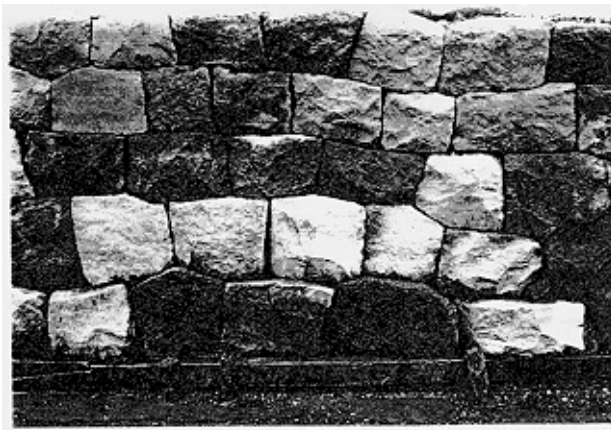


写真2 屋敷境石積み (仙台藩)

2) 舟入場と土留め板柵

使って整然と組み上げている (写真1, 2)。

仙台藩邸内に工法の違う廃土埋め立てのための「土埋め板柵遺構」と現在の「浜離宮」に近接した所に、当時の三角錐形の間知石を使った「舟着場」が発見された。

3) 上水施設

玉川上水が、本管から「樋」を通り桶・桝を経て井戸に導かれたことが判明した (写真3)。木



写真3 上水施設

樋にはマツ・ヒノキなどが多く使われたが、天災や人災のために何本もの樋がその都度焼跡の上に折り重なるようにつくられたため、樋が交差した状態で発掘された。なお、龍野藩では樋に多くの竹を使っていることが特徴的である。

(2) 明治時代

1) 駅舎の中央から南に向って、長さ約151.5m幅9.1m高さ1.2mの規模であったことが確認された。このプラットフォームは、凝灰岩で石組みされていた。また「0哩標識」の位置の正しさも認識された。

2) レール

イギリス製の上下共利用可能な双頭レールが輸入され使用されたが、腐食が激しく結局、上下逆にして再使用されることはなかったと見られる。

3) 転車台

「転車台」の土台は最大のもので直径40尺、深さ4尺あり凝灰岩の切石でつくられていた。また底面下部には1828本の基礎杭が打ち込まれている (写真4)。しかしこの「転車台」の上部は大正

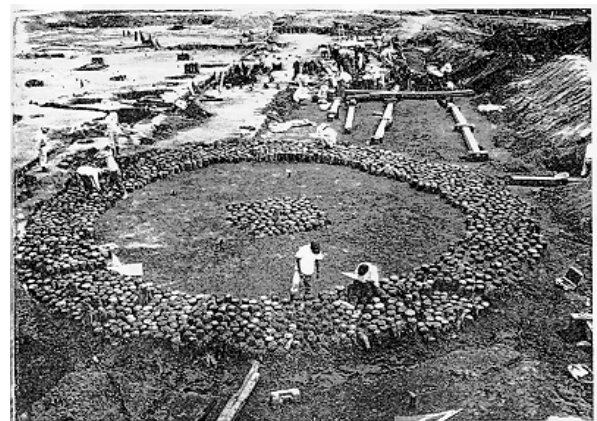


写真4 転車台の基礎

4年に姿を消している。

このように「汐留」の遺跡発掘調査は、江戸時代と明治時代の土木技術を知る上で極めて価値が高い。土木技術以外の事柄でも、多くの出土品から当時の生活状況をかなり明瞭に知ることができる。このことから、汐留の遺跡は都民のみならず国民全体にとっての大切な共有財産であるといえる。今後「汐留」は再開発によってほとんどの遺跡が失われてしまうが、可能な限り、この国民の共有財産が活用され、後世の人の為にも遺されることを望みたい。紙面の関係から本稿は要点のみにとどめた。

なお、本稿の作成にあたっては、(財)鉄道総合技術研究所の小野田滋氏及び東京都埋蔵文化財センター福田敏一氏から貴重な資料の提供等をいただいた。本文中の図一式はこれらの資料から引用したものであることを付記し、ここに深謝の意を表する。

第7回 国際都市計画史学会国際大会、ギリシャで開かれる。

国際都市計画史学会（International Planning History Society）が主催する第7回国際大会が、1996年10月17日から20日まで、ギリシャのテッサロニキ市のアリストテレス大学で開かれた。大会参加者約90人（同伴家族を除く）、論文72編（他に講演6編）が提出され、日本からは昌子住江関東学院大学助教授をはじめ、論文4編の発表があった。

今回のテーマは“Capital City”でヨーロッパの各首都を中心に、第二次大戦後の都市計画のコンセプトと実情に関する論文が多く、18～19世紀および20世紀初頭の計画の論述がこれに続いた。参加者は建築学関係者が最も多く、これに続き都市・地域計画、環境、歴史、地理、芸術・デザインその他の分野からの参加者が見られた。

講演、論文発表のほか、18日午後には市内見学（写真）、20日にはペラ、レフカディアの古代遺跡見学があり、ほとんどの参加者がこれに加わった。

なお、会議を締めくくるにあたり、同学会の中心的存在であり先ごろ急逝された故ゴードン・チェリー教授に対する追悼の言葉が述べられた。

開催地であるテッサロニキ市は、マケドニア地方にあるギリシャ第二の都市で、BC315年にマケドニア王、カッサンドルによって造られ、その後

2300年以上つづいている歴史的古都である。その名は彼の妻でアレキサンダー大王の妹にちなむもので、街の各処に遺跡や伝統的建物が点在し、現代の都市景観とよく調和している。

同市は1917年

に大火に遭い、その復興計画は1923年の関東大震災の復興に当たって、後藤新平東京市長によって招請されたアメリカの行政学者C.A.ビアードによって紹介された。

次回は1998年7月、オーストラリアのシドニーで開催の予定。



テッサロニキ市内に残るロトンダ遺跡

— 学 会 の 動 き —

第17回土木史研究発表会の開催と論文募集

土木史研究委員会では、来年度の第17回土木史研究発表会の開催にあたり、下記要領にて発表論文を募集します。

記

- 1.主 催：土木学会（担当：土木史研究委員会）
- 2.期 日：1997年6月12日（木）～13日（金）
- 3.会 場：日本大学工学部（郡山市田村町徳定）
- 4.部門構成：（1）審査付部門 （2）自由投稿部門
- 5.募集内容：自由（時代、対象、範囲等、全て自由）
- 6.論文の作成方法：タイプまたはワープロを使用し、A4判の用紙に作成。8頁以内を原則とし、最大12頁まで（1頁2016字）（原稿用紙は廃止）
- 7.提出書類：

（1）審査付部門：論文のコピー6部（等倍A4判。その内5部は執筆者・謝辞等、論文に関係した個人名を伏せて送付）および論文送付票1部。

（2）自由投稿部門：論文（元原稿）、論文コピー2部および論文送付票1部。

8.締切：本年度から事前申込をなくし、直接論文を受け付ける方式といたしました。ご注意下さい。

- （1）審査付部門：1997年1月20日（月）消印有効採否の結果は3月中旬に通知。修正意見等を考慮した最終原稿は、1997年4月11日（金）学会必着
- （2）自由投稿部門：1997年4月11日（金）学会必着

9.送付先：土木学会土木史研究編集小委員会
〒160東京都新宿区四谷一丁目無番地

その他、募集に関する詳細については、学会誌11月号（pp.79～81）をご参照下さい。

山本三郎名誉会員 文化功労者の栄誉を受ける

この度、土木学会名誉会員である山本三郎氏が、文化功労者の栄誉をうけた。これは、山本名誉会員の土木工学における長年の功績が評価されたものである。山本名誉会員は第51代の本学会会長、第5代の土木史研究委員会委員長を務めるなど、本学会に対する功績はもとより、河川事業を一体化する河川総合開発計画の概念を導入するなど、河川工学の体系化に努められた。過去に勲一等瑞宝章、前田工学賞などの受賞歴がある。

学 会 の 動 き

神奈川台場土木遺構調査報告書の概要

(神奈川台場土木遺構調査小委員会)

神奈川台場は、1860（万延元）年江戸湾の海上防衛拠点のひとつとして、幕府の命を受けた伊予松山藩が独力で建設した歴史的土木遺構である。幕末には品川台場など全国に数多くの台場が設けられたが、現在その遺構の残るものは少なく、希少性は高い。ただし、明治以降、周辺の海面埋立が進んで陸地に取り込まれるようになり、現在は大半がJR貨物東高島駅構内に、一部がNKK旧浅野ドック、及び横浜市の中央卸売市場にあって、石垣の一部が露出しているのみである。

地元には、自主研究グループ「神奈川台場を守る会」があって会報の発行等を行っているが、行政や研究機関等による本格的な調査研究はなされていない。

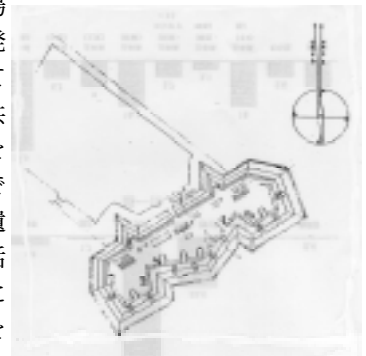
本調査は、平成7年度に（社）土木学会が横浜市神奈川区より委託を受け、神奈川台場土木遺構調査小委員会（委員長 新谷洋二 日本大学教授）を設置して、今後本格調査を行うためにはどのようなデータを収集すべきか等を中心に同年度中に取りまとめたものである。

報告書の骨子は以下のとおりである。

① 主として既存資料をもとに建設当時の状況やその後の変遷をたどり、歴史的な評価への足がかりとするとともに系統的な歴史調査の必要性和、求められる項目に言及した。

② 石垣露出部と放置石についての測定を行うと同時に、試験的に石垣埋設部の探査を行い、今後必要とされる調査項目と調査に関する提言を行った。

③ 神奈川台場周辺の再開発動向について調査すると共に、それらを踏まえた上で歴史的土木遺構の保存と活用のあり方について提言を行った。



明治14年陸軍省参謀本部
迅速測図・神奈川砲台

(文責 昌子住江)

『歴史的鋼橋集覧（第一集）』の供覧開始

(鋼構造委員会歴史的鋼橋調査小委員会)

明治の初頭から鉄道橋、道路橋など多くの鉄の橋が架けられ、日本の近代化を担ってきた。そしてまた、それらの橋は、その時その時の日本の力学と工学、技術と工業力のランドマークとも言える。それらの橋も、時代を経るに従って次第に架け替えられているが、系統的な調査もなく消滅している橋が多い。

このため鋼構造委員会ではかねてから歴史的鋼橋調査小委員会（現委員長小西純一、前委員長成瀬輝男）を設置してそれらの橋々の調査を進めてきた。

その成果のひとつとして小委員会では「現存する歴史的鋼橋一覧」を雑誌「橋梁と基礎」の1994年1月号から1995年7月号迄の間に4回にわけて掲載した。

またその調査結果の一部を利用して、出来るだけ広範囲の方が橋に親しめるように『鉄（かね）の橋百選』を（平成6年東京堂出版、定価3900円）出版した。

小委員会としての調査結果は第一頁に橋名、所在地をはじめとするその橋の要目を、第二頁に国土地理院発行の地図を利用した橋の位置図、それに一般図と現況写真を収録することとした一定の

フォーマットにしたがった「調査表」を一橋毎に作成整理をしている。

今回その第一集として戦前、特に明治・大正を中心とする約500橋分の「調査表」を整理製本した『歴史的鋼橋集覧（第一集）』を作成し、学会土木図書館で会員各位への供覧をすることとした。

この『集覧』は製本上の都合から上下2分冊にわかれている。今回収録した全部の橋についての選定方針、凡例等は各分冊の冒頭にそれぞれ入れているので詳しくはそれをお読み頂きたいが、今回の第一集に収録したのは第二次大戦以前、すなわち1945年以前に建設され、かつ現存する橋々である。ただ可動橋についてはこれにとらわれず国内でこれ迄に架けられたすべての可動橋を収録している。

各位のご利用をお待ちしている。

小委員会では現在さらに調査範囲を昭和30年代迄に広げて調査活動を続けている。小委員会では記載データ漏れなどについて各位のご教示、ご協力をお願いしている。

(文責 藤井郁夫)

土木史関係図書（地域土木史）

今回は各地域毎の一般土木史の図書を収録しました。

書名	編著者	発行所	発行年月日
ほっかいどう土木技術のあゆみ	土木学会北海道支部		昭和63年11月16日
東北の土木史	東北の土木史編集委員会		昭和44年6月10日
国造りの歴史 中部の土木史	土木学会中部支部	名古屋大学出版会	1988年2月25日
関西の土木100年	土木学会関西支部		昭和41年5月
土木へのいざない	土木学会中国四国支部		1991年12月3日
四国の建設のあゆみ	編纂委員会	四国建設弘済会	平成2年3月
九州土木紀行	土木学会西部支部	九州大学出版会	1989年11月18日
岩手県土木部小史	編集委員会	岩手県土木部	昭和54年2月25日
宮城の土木史	宮城県土木部	宮城県土木部 宮城県建設技術協会	昭和47年4月1日
秋田県の土木史 第一巻～第三巻	監修秋田県土木部	秋田県建設技術協会	平成2年3月
福島県土木史	監修福島県土木部	福島県建設技術協会	平成2年3月31日
埼玉県土木建築史 行政編	埼玉県土木建築史編纂委員会		
荒川区土木史	荒川区役所土木部	荒川区役所	昭和46年12月1日
神奈川土木行政のあゆみ	神奈川県土木部	財団法人神奈川県都市整備技術センター	平成5年6月
富山県土木交通史	富山県		昭和22年12月10日
石川の土木建築史	石川県		1990年
福井県土木史	福井県建設技術協会		昭和58年
山梨県土木部百年の歩み	山梨県土木部	山梨県建設技術センター	昭和58年3月31日
静岡県の土木史	五月会	五月会	昭和60年
建設のあゆみ（その1～その6）	愛知県土木部		昭和54年、55年、56年
愛知の建設	愛知県建設業協会		昭和32年
土木行政のあゆみ	名古屋土木局		昭和58年
滋賀県土木百年年表	滋賀県土木部		1973年
京都府百年の年表 7 建設交通通信編	京都府立総合資料館	京都府	昭和45年3月31日
建設行政のあゆみ	編さん委員会	京都市建設局	昭和58年3月
大阪府土木部60年のあゆみ	大阪府土木部監理課		
土木局80年のあゆみ	大阪市土木局		昭和54年4月1日
大阪の建設（第一巻～第二巻）	大阪建設業協会		平成6年5月1日
神戸のあゆみ	神戸市		昭和34年10月20日
香川県土木史	香川県建設技術協会		昭和51年
福岡県土木史年表	福岡県土木部		1978年8月1日
熊本土木	園田頼孝	中央印刷	昭和58年
天草建設文化史	天草地区建設業協会		昭和53年5月3日
宮崎県土木史	宮崎県建設技術協会		平成1年3月25日
鹿児島県維新前土木史	鹿児島県土木課		1934年
藩政時代の土木史	鹿児島県土木部河川課		1983年
鹿児島県土木史年表明治以降	鹿児島県建設技術センター		昭和60年7月21日
奄美土木史	入佐一俊	入佐一俊	1992年

お知らせ：イギリスの土木学会のホームページでICE土木史委員会のニュースレターを見ることができます。アドレスは
<http://www.ice.org.uk>

編集後記：本号で土木史フォーラムの発行2年目に入ります。この機会に本誌の配付先リストを見直すことに致しました。今後も土木史フォーラムの配付をご希望の方、あるいは新たな配付先をご紹介頂ける方は、同封の葉書をご返送下さいますようよろしくお願いいたします。

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No. 4
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 武部健一
事務局 日本大学理工学部 小山茂
〒274 船橋市習志野台7-24-1
TEL 0474-69-5219/FAX 0474-69-5811
E-mail: koyama@crpt.cst.nihon-u.ac.jp

CONTENTS

- NEWS
Excavation Study in Progress at Remains of Tokyo "Shiodome Station"
- FORUM
What is "Sub-committee on Strategic Planning for Civil Engineering History"? (BABA Syunsuke)
- LOCAL NEWS
Conservation Project of National Heritage "Shiwajo Castle" in Iwate Prefecture (MIYAMOTO Yutaka)
Modern Engineering Heritage in Nagasaki Prefecture (OKABAYASHI Takatoshi)
- OVERSEAS NEWS
First International Engineering Heritage Conference in Australia.
- OTHER INSTITUTIONS
International Planning History Conference in Greece.
- REPORT FROM COMMITTEES
Call for Paper of the 17th Conference of CHSCE '97
Brief Report on the Study of "Kanagawa Daiba"
First Volume issued on Study of "Historical Iron & Steel Bridges"
- BOOK GUIDE (Local History)